D 64　老年期における表示の明視性の研究（２）－ 日常生活の色の見え方 －

東京家政学院短大　◯今井弥生　高野美栄　井澤尚子　田原靖子
東京家政大　長塚こずえ、　文化女子大　盛田真千子

目的　健康に日常生活を送っている老年期の人を対象に文字の大きさと文字の色、背景色を変化させた時、どの範囲が見えるか、あるいは楽に見えるかについて調査し、表示の明視性を明らかにする。

方法　調査に使用した刺激資料は、和文、アルファベット、数字をまとめいたブロックを天地２ミリから９ミリまで視覚的に等差になるように８段階に設定し、黒・白・灰を背景色に文字色を赤・黄・緑・青・紫・黒・白・灰（文字色と背景色が同一の組合せは除く）とした２１種。和文は中ゴシック書体、アルファベットと数字はヘルベチカ書体を使用した。被験者は全国各地の６５歳以上の男女８７９名。男女の内訳は男２６０名、女６１９名。７５歳未満は５６８名、７５歳以上は３１１名。被験者は刺激を手にとり、見やすい距離を調節しメガネの使用は自由にして、日常生活に準じて判断させた。

結果　７５歳未満においては白地に７色の文字刺激に対して、見える範囲は若干のバラツキはあるが１段階（2ミリ）に集中していた。楽に見える範囲は各色とも２段階（2.5ミリ）から３段階（3ミリ）へ移行している。他の色に比べて黄の明視性の低さが認められる。灰地に対しては黄と紫の見える範囲が低下し、他の色も白地に対して低下傾向が認められる。楽に見える範囲は黄が４段階（3.7ミリ）に低下し、他の色も全般に明視性は低下している。黒地に対しては見える範囲、楽に見える範囲共に色による差が大きい。黄の明視性は高いが、青は低さが目だつ。８段階（9ミリ）が見えないものがかなりある。７５歳以上の被験者の判断は個人差が大きく、また見える範囲も低く、日常生活における不自由さをうかがわせた。